

# 文化

## 沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

乳飲み子を含む27人のベトナム難民が、約3トの小船で与那国島の久部良港に漂着(1977年5月1日)しては前回(9月26日掲載)記した通りである。S・Kさんは、機関員として海外で暗躍中、「水島発振器」をボケットに常時忍ばせていたの

信の可能性について東京工業大学出身の友人に電話で確認した。フリーピンに赴任途中の小野田寛郎元少尉

### 中野の精神

HK陸軍中野学校取材班「ビー」によると、小野田寛郎と末次一郎(旧名始は、(俣一)会員として名を連ねている。2人は中野学校での同期生だったのだ。同書に2人とも回想記を残し

## 「正規軍全滅後が出番」

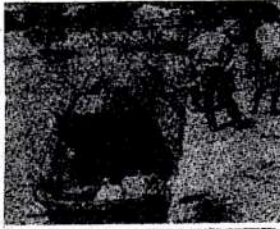
### 占領下の秘密戦も想定

末次一郎氏(青少年問題審議会会長)の案内で、ルバング島の旧日本兵・小野田寛郎さん(59)が、夫人とともに西銘順治知事を表敬訪問したという記事(同日夕刊「えんぴつ横丁」)によって、S・Kさんの証言が裏付けられた。

既刊本などから中野学校のカリキュラムや目的を知る事ができる。陸軍中野学校そのものは、1938年から45年の敗戦に伴う閉校までに2500人余の卒業生をだし、世界各国で情報収集活動の任務に就かせていた。その実体については、軍の内部においても一部の関係者にしか知られていない

いつきの「名利を求めない」生き方が基本だった。1940年8月に創設された「陸軍中野学校」の前身は、38年に秘密戦士養成機関の「後方勤務要員養成所」で、「外国に死ぬまで住みついて、その土地の間になりきって情報を送り続ける」とか「外国に協力者」を作って情報を入手する方針もとっていた。しかし、実際は戦局の変化で、武術や忍法など多種多様な内容が組み込まれている。帝国日本の組織的戦争遂行は、45年の半ばごろまでと判断し、以後はゲリラ戦に移行するだろうと、44年8月に陸軍中野学校一俣分校が開校された。その中に「内遊撃戦の参考」のもとに戦局の破局を想定した遊撃戦(フリール)、離島残置隊者(工員)、教育や敗戦後の占領下における秘密戦も想定していたが、それは中止された。沖縄での秘密戦中止については後述の中野学校出身者は各地での持ち場で、「中野の精神」のもと日本の再建に心砕いていたという。

## ベトナム難民27人漂着 日本本土への脱出途中



着のみ着のまま 食糧切れ寸前

与那国島にベトナム難民が漂着したことを伝える 1977年5月2日付琉球新報の記事

### 護歩案の扱いが焦点

政府 自民にせり



### 中野学校の前身

俣一戦史刊行委員会「陸軍中野学校 俣一戦史」二分の一 俣一戦史刊行委員会「陸軍中野学校 俣一戦史」二分の一 俣一戦史刊行委員会「陸軍中野学校 俣一戦史」二分の一

「1981年、俣一(会)N」

学校の教科は、一般教養基礎学として、国体・思想・統計・心理・兵器・交通・築城・航空・海軍・薬物学と戦争・日本戦争論に外国事情(軍事・政治・経済)その他はソ連(軍事攻

(次回は26日掲載)